



特集2「商い川柳」20周年

20年目を迎えた「商い川柳」

選者・荒井宗明先生が振り返る「私と川柳」

本誌の人気コーナー「商い川柳」が、今月号で20年目を迎えました。平成8年10月号に連載が開始され、今回が240回となります。20年間、変わらず選者を続けていただいている荒井宗明先生に、川柳の魅力や、川柳に取り組みきっかけについてなどをインタビューしました。また20年を振り返るコラムと、20年間の優秀句も掲載いたします。

—川柳の魅力は何でしょうか。

荒井 川柳の魅力は、ひとことで言うと「自由」ということ。何をテーマにしてもいい、何を詠み込んでもいいのが、川柳です。

もちろん、いくつかのルールがあります。言葉づかいも独特なところがありますし、5+7+5の形式も踏まえて作らなくてはなりません。しかしそれさえ踏まえていけば、あとはどんなことを詠んでも構わないのです。

と言っても、あまり下品なものは、やはり良くないでしょう。江戸から明治にかけては、男女の事などをあからさまに書く川柳もありましたが、それはあまりに品がないので、近年はそういうものはほとんど詠まれなくなりました。そういう種類の内容以外、庶民の生活の中の喜怒哀楽や、社会の出来事などを上手に織り込んで作るのが、川柳です。

同じ17文字の詩に「俳句」があります。形は同じですが、俳句と川柳はまったく別の芸術です。俳句は花鳥風月を詠むものであり、川柳は人間を詠むものだ、私は考えています。ですから、川柳の方が身近な存在なのです。

—荒井先生が川柳と出会ったきっかけを教えてください。

荒井 私が川柳に出会ったのは、30代の頃でした。当時、私は県の職員でした。ある日、用事があつて入った課で、机の上に川柳の本があるのを見つけ、何気なく手にとつて読んだのが始まりでした。その時はさほど感銘も受けなかったのですが、何か趣味を持ちたいと考えていたこともあつて、作り始めたのです。それが今につながっています。

たしかなる足跡

荒井 宗明

私はいま、20年になったという「商い川柳」の歩みについてペンを走らせているが、その思いに胸は熱い。

聞くところによれば、この「商い川柳」は、宇都宮商工会議所の会報『天地人』のオアシスに、との願いから、今は亡き藤井清会頭（当時）の発案で設けられたのだそうである。

世にいう「文化欄」的なものは、時の勢いで生まれることが多い。だから、ともすれば泡沫的である。

この「商い川柳」の依頼を受けた私の心も「果していつまでの命やら？」という危惧のあったことは否めない事実であった。



「作るだけでなく、選ぶ目を持つことが大切」と話す荒井先生

だが半年が経ち、1年が過ぎようとする頃から、私の疑念は一つずつ消えた。

そして、この「商い川柳」へ参加している人たちの本音を見ることが出来たのである。

カルチャークラブ的に見れば、とかく社交場的になりがちだが、この「商い川柳」の人たちは、よほどのことがないかぎり休むこともなく、淡々と黙々として、自分の目標に目を据えているのである。

これには、日頃怠惰な私も真剣にならざるを得なかった。

かくして20年、押し寄せる高齢化の波は、この欄も例外とせず、何人かの人が、黄泉の国へと旅立った。

しかし、それを補うごとく何人かの人が全国の大会で活躍、その榮譽に輝いている。またある人は、県内の川柳講座の講師として活躍するなど、心うれしいことも耳にしている。

かく言う私も20年前は、まだピカピカの70代、今なお老いずいられるのは、この欄あつてのことだったかもしれない。

せつかくの機会でもあるので、20年にわたる年間賞の中から、会頭賞に輝いた20句を紹介してその榮譽を讃え、泉下の藤井会頭への報告としたい。

—それ以前は文学活動はされていなかったのですか。

荒井 小学校4年生の時に国語の授業で「詩を作りなさい」と言われました。それまで詩など作ったことがないので、どうしたものかと頭を抱えていた私の目に、校門のところにいる荷物を積んだ馬と馬方の姿が見えました。馬は荷の重さに疲れ果て、動こうとしません。それを馬方がムチで叩いて、何とか動かそうとしていました。

それを見て、いるうちに、「重荷を引いて行く馬／辛そうだ／馬方の答が鳴る」

こんなことが浮かんで来たので、これを書いて提出しました。そうしたら先生が「この詩がいちばんいい」と褒めてくださいました。

私は当時は身体も弱く、そのために劣等感が強かったのですが、初めて作った詩がみんなの前で褒められたことで、劣等感を克服する

きっかけになりました。と同時に、この時に生まれた「詩」に対する興味が、のちに川柳につながったのだと感じています。

—川柳を勉強している人にアドバイスをお願いします。

荒井 川柳を詠む人は、自分の句を作るだけでなく、他人の句を選ぶ目も養うことが大切だと思います。他人の良い句を読めば勉強になりますし、そこで感じたり考えたりしたことが自分の句作のプラスになります。

今は作るだけの人も、いつかは選ぶ側に回ります。そういうことも考えながら、やっていくといいと思います。自分の向上になるだけでなく、川柳界全体の発展にもつながります。20年はあつたという間でしたが、これからも体力気力の続くかぎり「商い川柳」の選者は続けさせていただきます。

20年間の会頭賞

(平成8年～平成29年)

平成10年	一寸の虫を泣かせる五分の税	江部 政司 (江部酒店)
平成11年	露天の灯虫も稼ぎのうちに	鈴木美美子 (主婦)
平成12年	居酒屋の餌に集る雑魚の群れ	千葉マツノ (主婦)
平成13年	無駄な灯をともし場末の宵祭り	福士美枝子 (泉食堂)
平成14年	不景気の溜め息ばかり溜めている大塚	栄子 (主婦)
平成15年	不況風時には鬼と手をつなぐ	鶴牧美佐子 (主婦)
平成16年	恐いもの見たさ体重計に乗る	野口 直子 (主婦)
平成17年	栄転の話やっぱり四月馬鹿	鈴木美美子 (主婦)
平成18年	夫唱婦随夫も同じ葉飲む	駒場セツ子 (主婦)
平成19年	ネオン街えくぼ一つに操られ	伊藤 王子 (主婦)
平成20年	焼香の煙りに貸しをあきらめる	江部 政司 (江部酒店)
平成21年	老いの坂昨日転んでまた転び	宇賀神規子 (主婦)
平成22年	白鳥の空を汚さぬ北帰行	柳岡 睦子 (主婦)
平成23年	禁煙と決めた心の隅で悔い	鈴木美美子 (主婦)
平成24年	被災地にまず雑草が立り上がり	柏村久美子 (主婦)
平成25年	禁煙をしておやじを煙たがる	渋谷久美子 (主婦)
平成26年	向い風強い風景気千鳥足	生田目昭夫 (無職)
平成27年	コスモスへとんぼの影が定まらず	伊藤 王子 (主婦)
平成28年	おたからのように端株を温める	石田武三郎 (教師)



宇都宮商工会議所会報「天地人」商い川柳 選者 荒井 宗明 / あらい そうめい

大正13年生まれ。昭和33年に下野川柳会に入り、前田省郎に師事。昭和48年に栃木県川柳協会の結成に参画し、現在は同協会顧問。その他、栃木県文芸家協会顧問、栃木県文化協会参与、宇都宮省部会顧問、真岡文芸協会顧問を務める。句集に『春秋の賦』などを執筆するほか『栃木県近代文学全集』『栃木の文学史』『栃木県近代文学アルバム』などを分担執筆。昭和52年から宇都宮市広報柳壇選者、昭和59年から下野新聞文芸欄川柳選者、平成17年からNHK文化センター宇都宮教室川柳講師を担当。平成11年度「栃木県文化選奨」受賞。